

108, 150-156)。

本図はこのような経過の中で作製されたものと考えられ、東清鉄道沿線の状況を示している。

集落名については、⑮「昌図及威遠堡門貼付図」(図 18)と同様に河夾信子を河家信子、前砲手勾を前抱手勾と当て字が使用されている。また、營子をエンザと中国東北なまりの発音で表記している。これは、測図の際現地の住民に集落名について尋ねながら地図を完成させていたと考えられる。

⑭ 「沙河子附近之図」(図 26)

本図の測図エリアは、⑫「昌図(秘)」(図 22)の北部にあたる地域であり、東清鉄道のルートを中心に描いている。左上に「第六師團司令部製」としつつも右下に「第十師團参謀部」としており、もともとの図が第六師團によって作成されたことをうかがわせる。第六師團と第十師團は、ともに第四軍を構成しており、地図情報のやりとりが行われていたことを示している。

本図の測図エリアに対応する地域の地形図(図 27)と比較すると、交通路や鉄道のルートなどにかなりのズレがみられる。集落の位置関係も同様で、沙河子停車場の西部において、図 27 では新立屯は紅山堡と朝陽堡を結ぶ線の西方にあるが、本図ではそれが東方に位置する。また、北、中、下石虎子の位置は、図 27 では沙河子停車場(泉頭車站)の東南部に位置するのに対して、本図ではそれが東北部に描かれている。こうした点から本図は「目算測図」によるものと考えられる。

これに関連して注目されるのは、東清鉄道のルートが、図の北部部分では十分に把握されていないことである。これは、重要な交通路に関する地理情報を日本軍があらかじめ把握していなかった可能性を示唆している。

本図の縮尺は約 4 千分 1 と大きいのが、5 万分 1 縮尺の図 27 と比べて、集落間の距離は大差ない。その点から、縮尺約 4 千分 1 は 4 万分 1 との間違いではないかと思われる。

この他、本図と図 27 との相違点として、青揚[*yang*]堡を青陽[*yang*]堡と当て字が使われていることもあげられる。

⑮ 「昌図及威遠堡門貼付図」(図 28)

本図の測図エリアは、⑭「沙河子附近之図」(図 26)とほぼ同じである。縮尺にくわえ、道路の方向や東清鉄道のルートについては改善がみられるが、紅山堡-朝陽堡と新立屯の位置関係が図 27 と同様である。これらの点から、なお本図は「目算測図」によって作製されたと考えられる。

「貼付図」とされているところから、本図は同縮尺の図に貼り付けることを前提に作製されたものと思われる。⑬「昌図停車場附近補足図」(図 25)の場合と同様に、既存の図が、地図情報の増加とともに改訂されていったことを示すといえよう。

その他、本図は一部集落名において、沙河子をシヤカシ、満井をマンゼイと、日本語読みのカタカナで表示している。同じく第六師團参謀部製とはいえ、⑭「沙河子附近之図」(図 25)では集落名を漢字のみで表記していることから、測図者は異なると推測できる。

また図 27 と比較して、以下のような当て字が確認されている。河夾[*jia*]信子を河家[*jia*]信子、前砲[*pao*]手勾を前抱[*bao*]手勾、窑[*yao*]勾を腰[*yao*]勾、達[*da*]連砲を大[*da*]連砲などである。

⑯ (断片) 東清鉄道～石虎子～孤榆樹(図 29)

もともと本図の上下には、それぞれ接続する図が貼り付けてあったものが脱落したと考えられる。左(西)に東清鉄道、右(東)に吉林にいたる道路を示す。東清鉄道沿いの地名(双磨[*廟*]子)や吉林にいたる道路沿いの地名(孤榆樹)から判断すると(図 2 参照)、小縮尺の図である。等高線を示して詳しく示す部分と、集落名およびそれを結ぶ交通路を示すだけの部分があり、前者は「路上測図」によったものと考えられる。

本図群の中では最も北方を図示し、その情報源が注目される。



图 26. ⑭「沙河子附近之圖」

原图×0.56。



图 27. 沙河子附近 (5 万分 1 地形图「查罕牛泉」、「昌圖縣」、「双廟子車站」、「威遠堡門」图幅)

原图×0.57。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

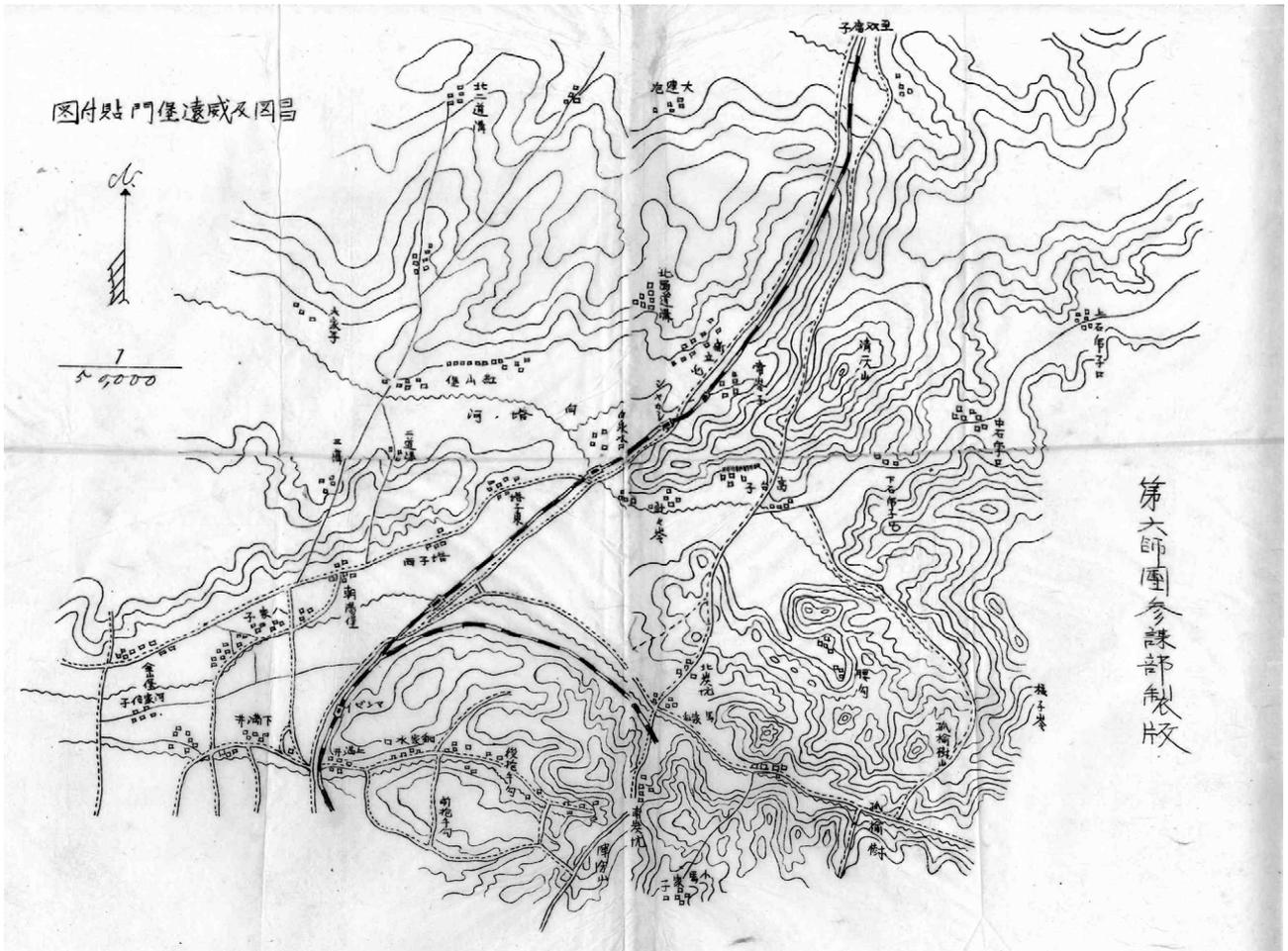


図 28. ⑮「昌図及威遠堡門貼付圖」(5 万分 1)

原図×0.42。

第六師團參謀部製版。

以上、本図群の 16 枚の図を検討した。その結果、本図群は偵察時に作成された「目算測図」や「記憶測図」によるもののほか、「路上測図」さらには「迅速測図」によって作成されたと考えられるものもみられることが明らかになった。このうち「迅速測図」による考えられるもの (⑪「威遠堡門 (秘)」[図 20] および⑫「昌図 (秘)」[図 22]) は、臨時測図部の測量技術者の作成と推定される。これに対して、その他の図は、現場の部隊の下級将校や下士官の作成となる。

また、後に作成された地形図と比較対照すると、臨時測図部の測量技術者によると推定されるものは、簡略ながらほぼ同等の精度をもつが、その他では、精度が低いことが明らかである。これをまとめるとつぎのようになる。

1. 地形は簡単に描かれており、標高や標高差は記入されていない。
 2. 広葉樹林や荒地および田などの土地利用が省略されている
 3. 集落名が当て字されている
 4. 道路の種類が異なる
 5. 縮尺は同じなのに、集落間の距離が異なる
- このうち、道路の種類が異なるのは、本図群が作成されてからの交通路の変化によるものが大きいとみてよいが、他の相違点は正確さよりも迅速さを重視する偵察図の特徴を示している。地名の漢字表記に関して、正確な書き方よりもむしろ発音や読み方が重視されていたと思われる点もそうした偵察図の特色と理解できよう

なお、本図群のもともとの所持者が単一の人物で



図 29. ⑩ (断片) 東清鉄道～石虎子～孤榆樹

原図×0.53。

あったとすれば、それは第十師団に属して威遠堡門付近の戦闘に従事した将校であった可能性が高い。また、地図の多くが複写物や印刷物であるところから、所持者が作製したものというより、その所属部隊で複写あるいは印刷されたもの、さらには他の部隊で印刷されたものが配布された場合がほとんどであったと考えられる。近代地図が整備されておらず、地図情報を自ら入手しつつ戦闘を行う場合には、このような方法によって地理情報の共有をはかっていく以外になかったと考えられる。

文献

小林 茂 2009. 『外邦測量沿革史 草稿』解説. 『「外邦測量沿革史草稿」解説・総目次』5-27. 不二出版.

小林 茂解説 2008. 『外邦測量沿革史 草稿、第1冊』不二出版.

小林 茂・山近久美子・渡辺理絵 2008. 初期外邦図の作製過程と特色. 2008 年人文地理学会大会研究発表要旨 42-43.

小林 茂・渡辺理絵 2008. 近代東アジアにおける地図作製技術の移転—日本を中心に. 千田 稔編『アジアの時代の地理学—伝統と変革』145-158. 古今書院.

参謀本部編纂 1914a. 『明治卅七八日露戦史』第十卷 東京偕行社.

参謀本部編纂 1914b. 『明治卅七八日露戦史』第十卷附图 東京偕行社.

参謀本部・北支那方面軍司令部編 1979. 『外邦測量沿革史草稿初編 自明治二十八年至同三十九年断片記事』ユニコンエンタプライズ.

- 参謀本部・陸地測量部・北支那方面軍司令部 1939.『外邦測量の沿革に関する座談會』JACA (アジア歴史資料センター) Ref. C04121449200; C04121449300 (防衛庁防衛研究所) .
- 白幡郁之介編 1892.『簡易測圖法』千城社.
- 多門二郎 2004.『日露戦争日記』芙蓉書房.
- 中国大陸地図総合編纂委員会作図・編集 2002.『中国大陸五万分の一地図集成総合索引 (改訂・増補版)』科学書院.
- 野坂喜代松・和田義三郎・平木安之助・高木菊三郎・松井正雄 1944. 明治三十七八年戦役と測量 (座談会) . 研究蒐録地圖 (昭和 19 年 3 月 1 号) 41-54.
- 茂沢祐作 2005.『ある歩兵の日露戦争従軍記』草思社.
- 山近久美子・渡辺理絵 2008. アメリカ議会図書館所蔵の日本軍将校による 1880 年代の外邦測量原図. 日本国際地図学会平成 20 年度定期大会発表論文・資料集: 10-13.
- 陸軍省 1893.『工兵操典』第五冊測量 川流堂.
- 陸軍大臣寺内正毅 1904. 陸軍大臣より高等工芸に関する学術を修めたる者の使用の件. 陸軍省『明治 38 年 1, 2 月分 副臨号書類綴 大本營陸軍副官』JACA (アジア歴史センター) Ref.C06040702100 (防衛庁防衛研究所) .
- 陸地測量部作製 1985.『旧満洲五万分の一地図集成』科学書院.